

2013年9月29日 「真の親子関係回復」 石川祐司教会長

以下に、訓読のみ言を掲載します。

<訓読のみ言>

『天聖經』

礼節と儀式 第1章 神様に対して侍る礼法

1) 神様に侍って生きるべし ①神様と人間は親子の関係

因縁の中でも標準となる因縁は、神様と人間の間結ばれた親子の因縁です。この因縁から始まった心情は、どんな存在の権限にも曲げられない永遠で、不変で、唯一なものです。また、この心情の権限は絶対的なものです。それゆえこの権限をもって現れる時、すべての存在物はその前に頭を下げざるを得ませんし、この心情の権限をもって動かす時、全天下は、それに従って動かなければなりません。これが宇宙の鉄則です。(7-105, 1959.7.26)

神様が創造当時、理想として願った真なる愛、偉大な愛を中心として人間との愛の関係を結び、一つになり得る神人愛一体の家庭を成したならば、今日私たちは「天国だ、地獄だ」と心配することなく、ただそのまま天国に入るようになるのです。(207-239, 1995.6.7)

父と息子が出会える最高の場所とはどこでしょうか。愛が交差する中心、生命が交差する中心、理想が交差するその中心で出会うのです。そのように見ると、愛と生命と理想が一つの場にあるというのです。その場に行けば神様も愛であり、私も愛であり、神様も生命であり、私も生命であり、神様も理想であり、私も理想になるというのです。これを決定づけることのできる最初の因縁と最初の統一の場所が、親子関係が成される場でなければなりません。これは間違いのない事実です。(69-78, 1973.10.20)

皆さん、「父子一身」という言葉はいったい何を中心として言う言葉ですか。これは愛を抜いてはいけません。愛と生命と血統が連結されています。

この三つの要件が必要です。「父子一身だ」と言う時、そこには必ず愛と生命と血統が連結されなければなりません。(197-235, 1990.1.19)

言葉で結ばれる親子の関係、約束だけで結ばれる親子関係は必要ありません。心を尽くし、精誠を尽くして父のみ旨のために生き、骨肉が溶けるような苦痛の中でも耐えて勝利する時、私たちは神様と親子の関係を回復できます。(2-235, 1957.6.2)

神様から愛を受けたいと思うその最高の立場とは、どのような立場でしょうか。その立場はまさしく息子の立場であり、娘の立場です。神様には天情があり、私たち人間には人情があります。この人情と天情が互いに合わさることのできる帰着点は、絶対者である神様も願い、人間も願うただ一つの場、すなわち一父母を中心とした息子、娘の立場で互いに愛を与え受けることのできる場です。(39-10, 1971.1.9)